

---

# セブンスドラゴン2020

しゅん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

セブンスドラゴン2020

### 【コード】

N6840Y

### 【作者名】

しゅん

### 【あらすじ】

アクションを楽しみたい読者向け。

## 電波塔からの最後の風景

殺人現場でも目撃してしまったのだろうか。

望遠鏡から、少し広いおでこを離し、彼女が俺に振り返った。

ここに来たときに比べその表情は暗く沈んでいる。

「どうしたの？」

聞くが彼女は答えない。

「大丈夫？」

聞くが彼女は答えない。

「何が見えたの？」

聞くと彼女は、小さな手で俺の腕を鷲づかみ、望遠鏡の前に立たせた。

俺は彼女に代わって、膝を少しだけ曲げ、望遠鏡を覗きこんだ。

真っ暗だった。

交代と同時に、時間切れになってしまったようだ。

展望台では双眼鏡を借りることもできたが、彼女の希望により、有料の望遠鏡で東京の風景を見ることにしたのだ。

俺も異論は無かった。

遙々東京に来たのだから、いちいち値段のことなど考えたくなかったからだ。

とは思ったものの、これ程時間が短いとは予想外だった。

双眼鏡の方がよかったかもしれない。

「ちょっと待って。」

彼女に言い、尻ポケットに入れた財布から百円玉を取り出した。

「何が見えたの？」

と硬貨を投入する前に、再度聞いてみるが、返答はなかった。

「…。」

彼女は何も言わず、早く見てと目で訴えてきた。

本当に、殺人現場でも目撃してしまったのだろうか。

だったら急がねばなるまい。

俺は望遠鏡の角度を変えことなく硬貨を入れた。

金属が流れる乾いた音と共に、視界が明るくなり、俺の目に巨大な翼が映った。

そして展望台が揺れ、俺達はその場に倒れるのだった。

## ドラゴン襲来

東京が影に覆われた。

都市の上空が翼の生えた生命体・後に『ドラゴン』と正式に命名される・によって埋め尽くされた。

レーダーに補足されず、どこから出現したのかも不明。

警察、自衛隊、政治家は、突如出現したドラゴン達にどう対処すればいいかもわからず、一般人に紛れただ呆然と見ていたのだった。

超高層ビルが乱立する都市を見下ろし、一匹のドラゴンが飛んでいく。

ドラゴンは遙か前方にそびえ立ち、都心に巨大な影を落とす『塔』を指していた。

滑空するように一直線に進み、やがて足が届く距離となると、翼を垂直に広げ減速し、塔の回りをグルグルと周り始めた。

飛び回りながら鋭い眼光を塔へと向け、鉄骨作りの表面を吟味する。

赤い鉄骨によって組み立てられたその塔は都内の超短波を送受信する設備を収容する電波塔であった。

東京タワー。

高さ三百三十三メートル。

たった一人の設計士によって図案は書かれ、建造は命綱一つに身をつつみ、狭い足場とビル風に翻弄されながら生身の男達に建てられたものだ。

建設期間は延長し、鉄骨部品が足りなくなった際には戦車を溶かして金属を集めたという。

先人達の偉業であり、技術の結晶ともいえる建造物である。

ドラゴンは後ろ足で鉄骨をつかみ、翼を下ろし重心を前に倒すことで塔へと着地した。

塔は垂直なので着地というよりしがみついているという方が正しいかもしれない。

翼を折りたたみ、しがみつくその姿は、東京タワーに巨大なコブができたようであった。

ドラゴンは空を見上げ、金色に輝く粉を吐き出し始めた。

ドラゴンの口からは噴水のように粉が吹き出し続け、太陽に照らされたそれらの粉は、東京タワーを中心に東京全域へと、円を描くよ

うに均等に広がっていくのだった。

旋回を続けていた他のドラゴン達は、翼で空気を叩き落とし、それは風として地上を駆け巡った。

歩道から立体高速、山手線の上から、東京メトロの地下鉄、さらに歌舞伎町の裏路地という裏路地の隅々まで風は吹いた。

するとどうだろう。

宙に漂っていた金の粉は風に乗り、地上へと流れたのだ。

それから数分後、粉塵は肥大しやがて開花し、毒々しい色の花を咲かせるのだった。

後にそれらの花々は、滅びを呼ぶ花『フロワロ』と名称される。

そして、フロワロの開花から、数時間後、ドラゴン達による本格的な『侵略』が開始され、国家を守るべく自衛隊による『防衛戦』が展開されるのであった。



No1 新宿駅にて(前書き)

ドラゴン襲来から数十年後、東京にて。

## No1 新宿駅にて

東京都庁より中央通りを東に進むと新宿駅である。

新宿駅とは言うものの、駅の面積は私鉄の駅とは比較できないほど広く、そして複数の路線が走るため構造は複雑なのだ。

初めて新宿駅を訪れると、乗りたい路線がわからず迷子になってしまっただけである。

『新宿駅にて』とは言ったものの、一言で伝えてもわからないのが普通だ。

厳密な場所は、新宿駅のバスターミナルである。

曲がりくねったバス停留所と、それを囲むガードレール、そしてところかしこに見られる、新宿駅地下へと続く階段。

ドラゴンや怪物達による攻撃を受けたものの、ここにはバスターミナルらしい面影が残っていた。

そして数分前まで、このバスターミナルで銃声が鳴り響いていた。

突撃銃を構えた十人が扇状に広がり、一匹のドラゴンを取り囲んでいた。

『ビッグカメラ！』と看板のたつビルが背後にあるため、怪物には

逃げ場が無く、ジリジリと押し寄せる銃弾の壁に追い詰められていく。

客観的に見れば、陣形を組む戦闘員達が優勢であるようにも見えるが。

だがドラゴンには慌てる様子がない。

むしろ楽しみに尾をパタパタと振っている。

青い鱗に覆われた胴体と、首から尾までが蛇のように細長い。

背中に生えた翼が空を叩き、地面スレスレに浮かぶそのドラゴンは、『ケミカルドラゴ』と名称される小型のドラゴンであった。

どういふ習性があるのか不明だが、全てのケミカルドラゴは玉乗りをするように、巨大な椰子の実のような物体にしがみついているのが特徴だった。

ケミカルドラゴは長い首を持ち上げ、陣形を組む戦闘員達を見回した。

なりやまない銃声と閃光に怯むことなく、最新装備に身を包んだジエータ隊員一人一人を吟味しているかのようだ。

「陣形を緩めて距離を取れ！」

扇の中央に立っていた男が左右へと指示を出す。

ケミカルドラゴは長い首が持ち上げ、一度後ろに頭を引くた。

そして勢いとともに前へと突きだし、次の瞬間、緑色のへドロを吐き出した。

まるで人間がツバを遠くへ飛ばすような仕草である。

優勢に見えたはずが、ケミカルドラゴが吐き出した毒が陣形を崩し、隊員達の最新鋭の装備を破壊した。

「カバー！」

かけ声と共に、重傷者を囲む隊員達。

「大丈夫か！？」

「しっかりしろ！」

毒に侵された仲間を引きずり、それを背にした一人が再び突撃銃を構えた。

「作戦中止だ！お前達は撤収しろ！」

弾倉を入れ替え、引き金の横に備えられたレバーを下げると、迫ってくる敵の頭部に標準を合わせた。

「隊長！？」

傷の深さが違うだけで、負傷したのは全員同じだった。

皆が毒に侵され、治療が遅ければ危険な状態なのだ。

それでも誰かが敵を引き止めなければ、全員が命を落としてしまう。

「早く行け！」

ぐらつく足腰に濁を入れ、隊長と呼ばれた男は引き金を引いた。

パン、パン

と、長い銃身の先から一発ずつ弾が放たれる。

集団包囲よりも正確な狙いが、ドラゴンを怯ませた。

ビクンと首を持ち上げ、翼を広げ距離をとるように飛んでいく。

「行け！今しかない！！」

隊長は振り返らずに叫び、逃げるドラゴンを追おうとした。

ケミカルドラゴはしがみついていた木の実を捨て、大きく羽ばたいた。

ゴーグルに粉塵がぶつかるが、怯まずに威嚇射撃を続ける。

ドラゴンは宙をグネグネとうねるように飛び回ったかと思うと、次の瞬間、隊長へと一直線に飛んできたのだ。

よけようとするが間に合わず、ドラゴンの頭突きに身体が吹っ飛ばされる。

「…！」

鉄骨のガードレールへ衝突し、意識が一瞬とんだ。

だが顔を上げるとドラゴンが再び飛んできた。

休む間もなく、地面を転げそれを回避する。

起き上がると同時に、迎え撃とうとするが、突撃銃は今の一撃で手元を離れてしまっていた。

しまった、と思う間もなくドラゴンの牙が向かってくる。

慌ててベルトを触ると固い感触が。

そして手から伝わる形から、その正体が解った。

「グアアアアアアア！」

望みと共に、迫る真つ赤な口へそれを投げつけた。

強力な爆風と共に、金属の塊が弾け飛ぶ。

…はずだった。

「！」

地面に接した自分の視界に無骨な塊が転がった。

投げられた手榴弾は炸裂することなく、元の形のまま地面に落ちた。

「…。」

最後の抵抗も虚しく終わった。

「ハハ…ハ。」

自分の不甲斐なさに出てくるのは笑みだけであった。

まさか、安全ピンを抜き忘れるとは。

あきらめかけたその時、ブーン、と耳元で何かが飛んでいった。

そしてケミカルドラゴが悲鳴を上げた。

翼が止まり、ズズウンと粉塵を巻き上げ、地面に腹をついたのだ。

倒れたドラゴンは狂ったように頭を振り回していた。

その頭には二つの意味で見慣れない物が突き刺さっていた。

自分が指揮する部隊の人間が所有していないことと、武器としては時代遅れであるということ。

突き刺さっていたのは一本の短刀であった。

誰が投げたのか。

振り返る間もなく、地響きと共に自分の脇を走っていく一人の背中。

やはりそれは部下ではない。

服装も武装もまるで違い、まったく見慣れない姿であったからだ。

誰なのかはわからなかったが、その背丈と肉体から男であるということだけはわかった。

再び飛行しようと体位を立て直したケミカルドラゴ、そして走る背中是一直線にそれへと走る。

ドスン、ドスンとブーツの音を響かせ、ニメートル近い巨体が走る。

頭を下げ、肩を盾に風を切る巨体。

地面を蹴り、全ての加速と重量をドラゴンへと叩きつけた。

破壊鉄球のような一撃に、ドラゴンは悲鳴も上げずに吹っ飛び、新宿駅の地下道への壁を突き破った。

「嘘だろ…?」

体当たりをかました人物は素手ではなかったらうか。

陣形と銃撃をもってしても苦戦する相手を叩き落とすとは。

地下へ落ち、見えなくなった一人と一頭。

「大丈夫です。すぐに終わらせますから。」

声と共に金属の擦れる音が自分の横を通り過ぎた。

呆気にとられ、未だ倒れている自分の前に、刀を構えた女の背中が立ったのだ。

腰まで伸びた黒炭のように黒い髪と、白いシャツ。

そしてミニスカートにニーソックスというこの場には不似合いな姿であった。

まさか戦つつもりなのだろうか。

刀を構えている時点でそうだろうか…。

彼女は先程の巨体につき、粉塵の中へ飛び出していった。

## No2 二人の精鋭

「新宿駅に出現したケミカルドラゴに対し負傷した模様、直ちにメデイカルルームへ移送せよ。」

「現場に残った人数は？」

「第三小隊の隊長、一名のようです。」

「了解。」

負傷者を担架に乗せ、衛生兵がビルへと入っていく。

このビルは東京都庁。

かつては東京都における様々な事務を執り行う役所であった。

現在はドラゴンから東京を奪還するための砦として機能していた。

砦を指揮するのは政府が有事に備えて組織した、『特務機関ムラクモ』である。

「ケミカルドラゴ討伐のため、付近にいたムラクモの戦闘員が増援に向かったらしい。」

手当てを受けていた隊員のもとに報せが届いた。

「人数は？」

「二人だ。」

思わず包帯の巻かれる腕を振り上げそうになった。

特務機関ムラクモの任務は東京の奪還であり、個人の救出ではない。それを受け持つ部署もあるが、あくまで首都奪還の作戦を基盤にムラクモは機能しているのだ。

生死の定まらない一人のジエータイのため、これ以上増員されることはないだろう。

「安心しろ。特務機関ムラクモでも精鋭の二人組だそうだ。」

肘を曲げ、柄を持った右手を耳の後ろで止める。

左手を刀身のミネに添え、肩の力と腰を落とす。

まるで弓を引くかのような姿勢だが、構えているのは刀である。

眼下には地下へと続く階段。

本来なら、地上に面した部分は屋根と壁に覆われているが、それは一分前に相棒が壊してしまった。

階段の奥は粉塵と暗闇に隠れ何も見えず、ただ二つの巨体が蠢いているのが直感できた。

ドラゴンの咆哮と、拳のぶつかる音、そしてむき出しのコンクリートの臭い。

相棒は戦い続けている。

「デスさん、大丈夫!？」

下へ向かって叫んでからしばらくすると、蠢いていた一人が地上へと顔を出した。

男は彼女よりも五段下の段に足をのせているが、彼女の視線は相棒のサングラスにピタリと合った。

「大丈夫だ、敵も弱らせた。止めは任せたぞ。」

ギターの低音が唸るような声で相棒は返事をし、彼女と同じ段差へ立ち拳を構えた。

不似合いな二人が並んだ。

三十センチは違うだろうか。

銃撃と、体当たりの一撃に加え、地下での拳による一騎打ちを受けたのだ。

ケミカルドラゴは弱っていた。

ここで刀による一撃は決定打となるだろう。

それを悟っているのか、ドラゴンはなかなか地上へと顔を出さない。

「…。」

「…。」

「グルル…。」

「…。」

「…！」

粉塵の中から飛び出したのは毒のヘドロだった。

「デスさん！」

刀を構えた彼女を庇うように、相棒はそれを背中を受け止めた。

「ちっ！」

「デスさん！」

「グルルルルルアア…！」

「俺にかまうな！止めをさせ！」

膝をつく相棒を尻目に、女は腰を少し引いた。

胸を張り、肩胛骨をくつつけるかのこどく刀を持った腕を引く。

咆哮と共に、ケミカルドラゴが粉塵からぬうつと顔だけを現した。

ゴツゴツした青い顔には、赤い液体が滝のように流れている。

ドラゴンの頭部には脇差しによる傷が残っていた。

女は上半身を半回転させ、右手で支えていた刀を傷痕へ向け貫いた。

両端が壁に包まれた階段では、断末魔の叫びが永遠と反響していたのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6840y/>

---

セブンスドラゴン2020

2011年11月20日19時46分発行